

令和5年度小田和湾環境調査「春季調査」の結果概要

1. 環境モニタリング調査

1) 調査内容

調査実施日：令和5年5月16日

- ① 海域水質調査
- ② 海域底質調査

環境モニタリング調査

小田和湾の健康診断的な調査であり、平成元年度から概ね春季と冬季の2回実施している。

本年春季に実施した、水質・底質調査の結果、水質・底質は変動範囲内であった。

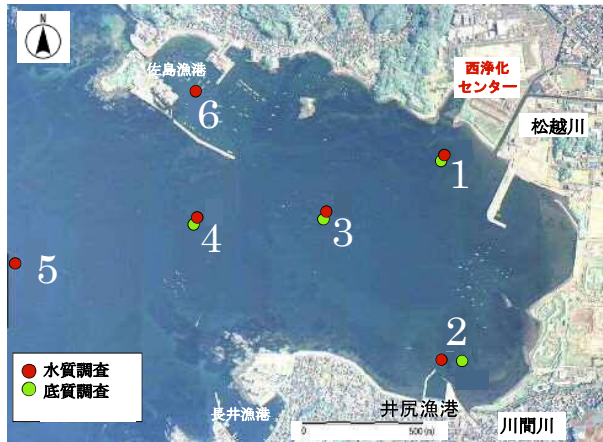


図-1

2) 調査結果

① 海域水質調査 (図-2~7)

各グラフには、6地点の平均値を赤線で、最高値と最低値の幅を灰色の縦線で示した。

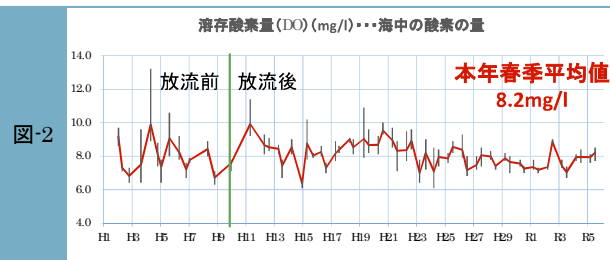


図-2

溶存酸素量(DO):安定
海水中に溶け込んでいる酸素量で、この値が低くなると魚介類が生息しにくい。
本年春季では、これまでの変動範囲内であった。
基準値：6mg/l以上(参照：水産用水基準)

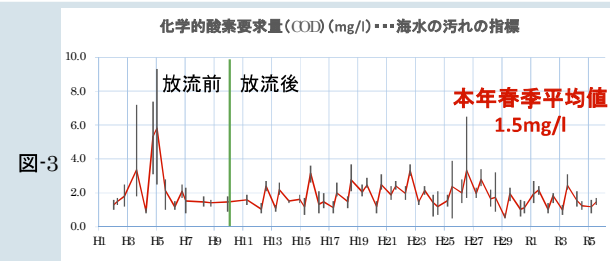


図-3

化学的酸素要求量(COD):安定
海水の汚れの指標である。
本年春季では、これまでの変動範囲内であった。
基準値：2mg/l以下(参照：水質汚濁に係る環境基準)

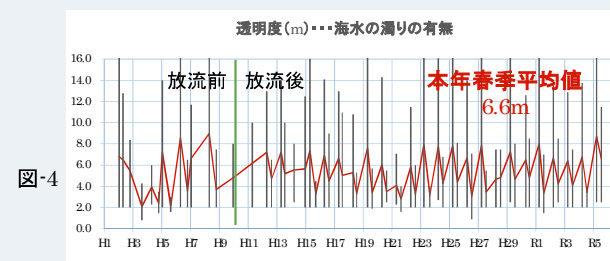


図-4

透明度:安定
海水の濁りの指標で、小田和湾の特性として春季に低く、冬季に高くなり、また沖合で高く、湾奥部で低くなる傾向である。
本年春季では、これまでの変動範囲内であった。(Stn.2井尻漁港外の最大水深は-2.0m)

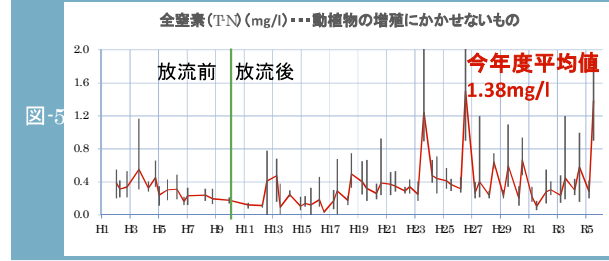


図-5

全窒素(TN):安定
動植物が育つために必要な栄養分である。ただし、全窒素が多くなりすぎると富栄養化の原因になる。
本年春季は、1.38mg/lと高かった。その原因は前日に降雨があったためと考えられる。

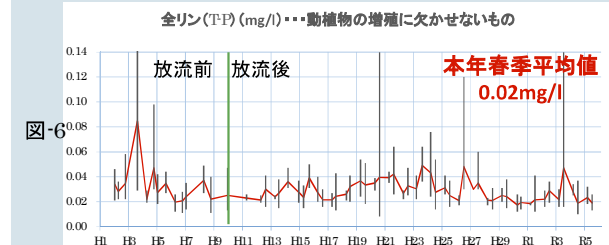


図-6

全リン(TP):安定
リン化合物の総量で、全窒素と同様に動植物の増殖に欠かせないもので、窒素とともに栄養塩と呼ばれる。
本年春季では、これまでの変動範囲内であった。

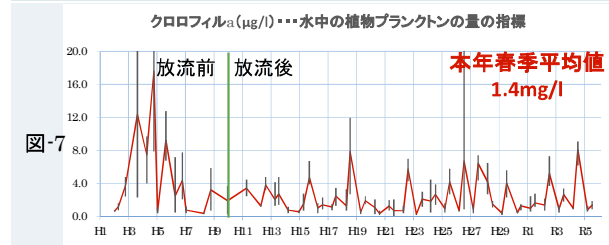


図-7

クロロフィルa:安定
海水中の植物プランクトン量の指標である。
放流開始後のH18、H22、H26、H27では、赤潮発生により高い値を示した。
本年春季は、これまでの変動範囲内であった。

② 底質調査 (図-8~9)

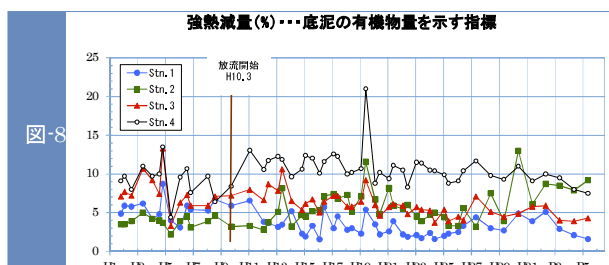


図-8

強熱減量
底泥中の有機物量を示す指標であり、一般に砂では低く、シルトでは高い。
ここ数年は、Stn.2(井尻漁港)でH22~H29に比べてやや高かった。

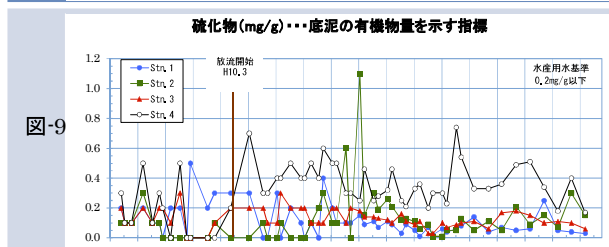


図-9

硫化物
底泥の有機物量を示す指標であり、砂では低く、シルトでは高い。
ここ数年は、Stn.2(井尻漁港)でH22~H29に比べてやや高かった。